岡倉天心　茶気（CHAKI）の男

―図書館展示記録―

伊津美　泉

はじめに

神奈川県立図書館（以下「当館」という）本館１階展示室において、2013年２月から同年５月までの３ヶ月間、「岡倉天心　茶気（CHAKI）の男」と題して、横浜ゆかりの人物である岡倉天心（以下「天心」という）について展示を行った。

天心の功績を一言で表す事は難しい。評伝を見ても、思想家、美術指導者、哲学者、美術評論家、美術行政家と様々である。

2013年に生誕150年、没後100年を迎えた事もあり、天心はちょっとしたブームになっていたが、画家だと思われている事も多く、正しく知られていない面もあった。天心の生涯と功績を当館資料と共に振り返り、普段目にする事が少ない郷土資料を中心に展示を試みた。

タイトルに用いた「茶気」とは茶道の心得のひとつで、風雅、茶目っ気のある様子を表している。天心が1906（明治39）年に出版した３冊目の著書『The Book of Tea（茶の本)』の中の一節に「私たちの間では、人の身の上におこる悲喜劇の面白味のわからない人間を、俗に、あの男は『茶気がない』といいます。一方、世俗の悲劇には無頓着で、感情のおもむくままに浮かれ騒ぐ粋（す）き者気どりを非難して、あの男は『茶気がありすぎる』などといいます。」[1)] と記されている。

天心の資料を読み進めるうちに、彼が欧米の視線を意識したマーケティング的戦略を立てる一方、日本の伝統を守り、新たな才能を育てた功績は、「茶気」なくしては成し得なかったのではないかという個人的な結論により、上記のタイトルを用いた。

本文は当館所蔵の『岡倉天心アルバム』[2)]と『岡倉天心日本文化と世界戦略』[3)]を主な参考文献として構成し、パネル展示したものを編集した。

岡倉天心の本名は覚三だが、文中表記は後年に号（筆名）として使用され一般に普及した「天心」に統一した。

1　幕末生まれの国際人

横浜が港を開いた 1859（安政６）年、イギリス、フランス、アメリカ、オランダ等の西洋人が続々上陸し、外国人居留地に外国商館が建ち並びはじめた。

岡倉天心は 1862（文久２）年、開港直後の横浜に貿易商の次男として生まれた。（図１）[4)]

図１　中区にある岡倉天心誕生之碑
題字：安田靫彦
ブロンズ彫刻：新海竹蔵
所在地：横浜開港記念会館前
横浜市中区本町 1-7[5)]

父覚右衛門は、もともと越前福井藩に仕える下級武士であったが、藩の横浜商館手代に任じられ、1860（万延元）年から横浜開港地で生糸、藩の特産品などを扱う貿易商「石川屋」を営んでいた。石川屋は横浜本町五丁目の角にあり、表間口六間、奥行十五間、建坪九十坪という大きな店舗で、常時欧米の商人達が出入りをしていた。『横濱開港見聞誌』には、石川屋に外国人が来店している様子が描かれた図版が掲載されている。（図２）[6)]

図２　石川屋

天心は最初、石川屋の角で生まれたため「角蔵」と名付けられた。その後「覚蔵」、17 歳頃から「覚三」を名乗っている。

自ら天心を名乗ったものは詩や絵、一部の書簡に限られ、公式な文書や

著作では覚三が使われた。死後、天心が戒名に用いられ、全集や碑に使用されるようになり、一般に普及した[7)]。

天心は日常的に外国人が往来する国際性ゆたかな環境で育ち、７歳からアメリカ人宣教師ジェイムズ・バラの私塾に入り英語を学んだ。横浜外人居留地という特殊な土地で学んだ英語は、のちに天心の進路を決める大きな力となった。

８歳で母をなくした天心は、再婚した父の都合で、当時神奈川新町にあった長延寺（現在地：横浜市緑区）に預けられた。住職玄導和尚の元で漢籍の勉強を始め、９歳で英語と漢詩を習得したといわれている。

2　フェノロサとの出会い

1873（明治６）年、藩の指示で石川屋が閉められ、岡倉一家は東京日本橋に移って旅館業を営むようになった。

天心は東京外国語学校に入学し、13 歳で東京開成学校に入学。２年後に東京開成学校が東京大学に改組された事に伴い、文学部二年級第一課（文学、哲学、政治学）に編入。15 歳の東京大学一期生となった。

政治家で、のちに早稲田大学の総長になった高田早苗の手記『半峰昔ばなし』の中に、当時の天心の様子が描かれている。「或日、小川町邊の牛肉屋へ登つて飯を食つて居ると、隣席に岡倉覚三、福富孝季が居た。此の二人は我々よりも二学年先輩であつて、談偶西洋小説の事に及ぶと、岡倉君は頻りにビクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』の話をする。又福富君はヂューマの『モント・クリスト』の話をし出した。私も負けぬ氣でスコットの『アイヴ゛ンホー』の略筋を語り、互に頗る興味を感じたのであった。」[8)] 天心は西洋文学の抜きん出た読み手でもあった。

大学入学の翌年、1878（明治 11）年に東京大学のお雇い教師としてアーネスト・Ｆ・フェノロサが来日する。ハーバード大学で哲学を学んだフェノロサは、政治学、哲学史、経済学などを教えながら、古画や浮世絵、狩野派等の日本美術のコレクションを始めていた。

当時、明治維新の大変動による西欧化の波が旧物排斥を推し進め、更に

新政府による神仏判然令(1868 年布告)から、廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)が全国に広まり、寺院の建物や仏画、古文書等が散逸していった。伝統的な諸芸や美術品等の古物は無価値とみなされ、市井に流出したが、それら古美術品を西洋人が盛んに買い取り、自国へ持ち帰った[9)]。

フェノロサもこの西欧コレクターの１人であった。

古美術商や狩野派絵師との交渉、文献調査などの通訳として英語に堪能な学生が必要となり、フェノロサと天心は出会うことになる。

19 世紀後半にフェノロサ、ウイリアム・スタージズ・ビゲロー（アメリカ人医師・美術蒐集家）らが日本で集めたコレクションは１万点を超え、これらはのちにボストン美術館日本コレクションの中核となった[10)]。

3　失われた日本美術の再発見

東京大学を卒業し、文部省に奉職した天心は、前年新設された音楽取調掛となった。当時、管弦楽の本格的教授として来日していたルーサー・W・メーソンの通訳、旅行手続き等の事務業務を担当している。メーソンは日本で最初の音楽教科書『唱歌集』[11)] を編集し、日本の音楽教育に足跡を残した人物である。

天心はその後専門学務局内記課に移動、文部少輔九鬼隆一の学事巡視に随行し、1883（明治16）年頃から本格的に全国の古社寺調査を開始した。

美術行政確立のための本格的な古社寺調査はこの時初めて行われた。

数ある古社寺調査の中でも、100 年以上もの間開かれることのなかった法隆寺夢殿を開帳し、秘仏救世観音（図３）[12)] を拝した事は良く知られている。

図３　法隆寺夢殿　救世観音像

当時、夢殿を開けば必ず落雷があるといわれ、恐れる寺僧らに文部省の調査命令書を示し、観

音を包んでいた布、経典を取り除いた時の様子を、天心は次のように回想している。「除き終われば七尺有余の仏像、手に珠を載せ厳然として立てるを見る。一生の最快事なりというべし。幸ひに落雷にも遭はざりき。此の仏像は百五十余年前迄は秘仏ならざりしか。」[13)]

このような芸術的感動を原動力に、天心は日本美術の保護と復活を推進していったのだろう。

4　日本で最初の文化財保護法

1888（明治 21）年、天心は宮内省に設置された臨時全国宝物取調局取調係に就任。次いで帝国博物館の理事兼美術部長に任命され、美術館行政において中枢に立つことになった。臨時全国宝物取調局では、1897（明治 30）年までの 10 年間、主任として 21 万点の重要美術品を鑑査し、鑑識家としての才腕を発揮した。

臨時全国宝物取調局の廃止とともに内務省に設置された古社寺保存会では、委員として「古社寺保存法」（我が国最初の文化財保護法、1897 年公布）の成立に貢献した[14)]。天心の発案した「現状維持修理」は、現代の古美術保存においても最も適切な修理法として採用されている[15)]。

5　東京美術学校創立

1887（明治 20）年、勅令「東京美術学校設置の件」が公布され、天心は東京美術学校幹事を命じられた。1889（明治 22）年、第一回生 65 名を迎え、東京美術学校が開校。授業では美学・美術史にフェノロサ、和文・歴史に黒川真頼、古物学・美術史に今泉雄作、絵画に橋本雅邦、彫刻を高村光雲が担当した。

芸術家が高い技術と広い視野を持つことを目指し、実験的なカリキュラムが組まれた。古典的な筆法を学習するため忠実に模写する「臨画」、描く対象を正確に写し取る「写生」、それらが出来て初めて自らの絵作りを研究する「新按」。現在の美術教育にも通じるこれらの授業は、天心らが確立した指導法である。

翌年、天心は校長に就任。同時に教壇にも立ち、日本美術史の講義を行っている[16]。

制服は、奈良時代の官僚の制服をもとに天心が考案した。(図４)[17] 東京美術学校は 1949 年、東京音楽学校を包括し「東京芸術大学」と名を改め現在に至っている。

図４　自らデザインした制服を着た天心

愛馬「若草」に騎乗して登校。頭には冠帽、足にはアザラシの革で作られた靴を履いている

6　美術雑誌「国華」創刊

木版多色刷り図版を用いた月刊豪華美術雑誌『国華』[18]（図５）が創刊されたのは 1889（明治 22）年。

出版元である国華社の実質的経営者は、内閣官報局長高橋健三と天心であった。

『国華』は現在も朝日新聞社から刊行され続け 1400 巻を越えている。古美術研究誌としては世界最古のものとなっている[19]。

図５　『国華』創刊号 1889 年

当館では 750 号（1954 年）から継続購入しており、展示では 835 号「岡倉天心生誕百年記念特輯」、1400 号「岡倉天心生誕百五十年記念特輯」を陳列した。

7　日本美術院創設

1898（明治 31）年、帝国博物館内部で人事をめぐる紛争が起こり、理事兼美術部長を務めていた天心は辞職。この騒動は美術学校にも飛び火し、

事件の内幕を曝露するような新聞記事や、天心を誹謗中傷する怪文書が出回り、ついには東京美術学校をも学校長非職（免職）という形で追われる事になった。

天心が美術学校を退いたニュースは大きな波紋をよび、橋本雅邦をはじめとした天心を師と仰ぐ教員が次々辞表を提出。最終的に 17 名が天心と共に辞職することとなった[20)]。

天心はすぐさま芸術家のマネージメント機関、日本美術院を創設する。美術学校を辞職したその年に美術院を創立するという、天心の卓越した行動力を垣間見る事が出来る。

その年、日本美術院第一回展（院展）が行われ、横山大観が「屈原」（図６）[21)] を出品した。この絵は、官界を追われた天心の心情を、屈原という人物に投映して描かれている。

図６
横山大観「屈原」
1898 年

屈原は、楚の国の重臣でありながら同僚の虚偽によって追放され、その楚が敵の手に落ちるのを聞き、悲憤のあまり汨羅（べきら：中国湖南省の河）に身を投げた中国古代の伝説的人物である[22)]。

髪が乱れ、物思いに沈みながら水の淵へ歩を進める屈原の右手には、かおりぐさ（建蘭＝美の象徴）が握られ、背後には邪悪な目をした燕雀と鴆（ちん）の２羽の鳥が描かれている。一連の騒動の首謀者といわれている福地復一が燕雀、大村西崖が鴆で表現されているという説が一般的である[23)]。

美術院の経営は順風満帆とはいえず、明治 40 年代にはほとんど活動が出来ない状況になっていたが、横山大観、下村観山、菱田春草といった若い画家が育ち、天心の書生であった塩田力蔵も近代陶磁器研究の第一人者となった[24]。

８　日本はアジア文明の博物館

天心は日本美術の研究から、清国（中国）に３度、インドに２度訪れている。アジア文化の源流を探る研究と同時に、培った英語表現の豊かさで、様々な方面に人脈を広げていった。

1901（明治 34）年、世界の諸宗教の融和を説き、大きな話題を呼んでいたヒンズー教の宗教家ヴィヴェカーナンダとの出会いは、天心に大きな感銘を与えた。

さらにインドを代表する詩人で思想家のラビンドラナート・タゴール（アジアで初のノーベル文学賞を受賞）と交流を深め、お互いを高く評価しあう関係が築かれた。日本とインドとの文化交流において、天心の果たした役割は極めて大きい[25]。

タゴールはのちに著書『東洋文化と日本の使命』[26] の中で、「彼（天心を指す）がいかにも自然に心易く、わたしどもの民族と生活を分かち、わたしどもの心に自分の国のためばかりでなく、全人類のために善への希求を呼び覚ましたことは、わたしどもにとっても得難い機縁でありました。」と記している。

天心は当時の欧米帝国主義のアジア植民地支配に対し、インド、中国、日本等アジア文化の重要性と再確認を呼びかけていた。

「日本はアジア文明の博物館である」と説いた著書『The Ideals of the East（東洋の理想）』[27] はインドに向かう前から英語で書き継ぎ、インド滞在中（1901～1902 年）に完成する。

生前出版されずにいた『The Awakening of the East（東洋の覚醒）』もまた、この旅行の過程で書かれたものだった。この草稿は、天心の没後約 30 年間箧底（きょうてい）に秘められ、最初は『理想の再建』[28] と題され日

本語に訳された。草稿の段階で、原題として考えていたと思われる「We are One」（「我らは一つである」）の自筆メモが挟み込まれていた[29]。

９　天心と出版

天心の言葉として最も有名な一節、「Asia is One」で始まる『The Ideals of the East(東洋の理想)』[30]（図７）は、1903（明治 36）年、ロンドンのジョン・マレー社から出版された天心の処女作である。

日本語の完訳は 1935（昭和 10）年、天心の死後 20 年以上経ってから発売された聖文閣版『岡倉天心全集』[31] に収録されたものが最初である。アジアの現状を肉眼で捉えた重みのある言葉で綴られた本書は、独創的な美術論を展開している。

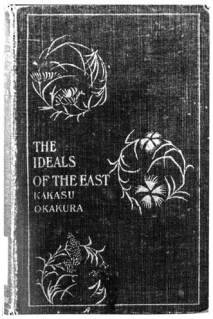

図７　『The Ideals of the East（東洋の理想)』初版本　1903 年
覚三の名前を“KAKASU”と誤植している

10　ボストン美術館

アジアを訪れた天心は、消えかかるアジア文化の価値を改めて重視することとなった。

その反面、日本で活動の場を失っていた彼は、日本美術院の経営が困難だった事もあり、絵を売り資金を稼ぐため、横山大観、菱田春草、六角紫水ら日本美術院の同人を連れアメリカに渡る。

1904（明治 37）年の訪米は日露戦争勃発直後で、和服姿の天心はジャーナリストに注目される事となる。ニューヨーク・ボストンでの展覧会を行い、『The Awakening of Japan(日本の覚醒)』[32]（図８）の出版へ至る。

日露戦争を背景に、天心の目線で日本の国家的成長の要因を描いた本書は、戦況だけでなく、日本文化への世界的注目も集める事となった[33]。

その後、日本ボストン美術館の理事を務めていたビゲローの斡旋により、天心はボストン美術館の東洋部顧問として就任。手つかずになっていた3642点の日本絵画目録作成の仕事がメインであったが、天心の仕事はたんに日本美術品整理だけではなかった。所蔵品が最大の東洋美術コレクションであることをアピールするため、美術館紀要に論文を発表したり、収蔵品の保存袋を美術館理事の婦人方に作らせることによって芸術作品への対し方をレクチャーしたり、茶会を開いて「茶道」を講義するなど、様々な方法でアピールを試みた[34)]。

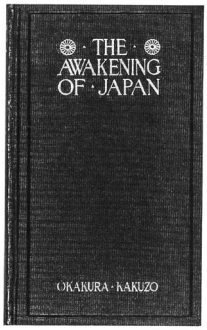

図８　天心２冊目の著書『The Awakening of Japan（日本の覚醒）』初版本　1904年　センチュリー社

11　著書「茶の本」

天心の代表作のひとつ、『The Book of Tea（茶の本）』[35)]（図９）は、この２度目のアメリカ滞在の終わり、1906（明治39）年５月にニューヨークのフォクス・ダフィールド社から刊行された。

天心は東大在学中から茶の湯に親しんでいた。本書は、日本の茶道に託して、東洋の美と精神、芸術論の核心を英文で綴っている。

『茶の本』では、茶の湯が中国において時代の宗教、哲学、人情を貪欲に吸収し発展した過程をたどる。そして、日本は中国の茶が変化するために必然的に置き忘れてきた諸理想を生かし、茶道という一大審美体系とした、と主張した。

『茶の本』は欧米人に大歓迎された。

斎藤隆三の著書『岡倉天心』[36)]にある一節が当時の様子を伝えている。「本書一たび米国に出でて忽ち全米を席捲する観あり。中学校の教科書にまで転用されたがさらに出版所を異にして二、三所からも表われ、また海を

越えて欧州に及んでは、仏文にも独文にも訳出刊行されて全欧州大陸に普及し、ブック＝オブ＝ティーの岡倉として岡倉の名を全世界のもの足らしめた。」

本書の日本語版は、1929（昭和４）年に村岡博の訳した岩波文庫版『茶の本』[37] が最初である。天心の死後 16 年が経過してから出版された。

その後様々な翻訳で出版され、現在も版を重ねている。

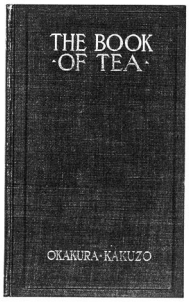

図９　『The Book of Tea』初版本　1906 年　の表紙
扉には「To John La Farge Sensei」と、アメリカ人画家で天心と親交の深かったジョン.ラファージへの献辞が入っている。原稿は約 2 年間にわたって書き継がれ、推敲に推敲を重ねた出版になった。[38]

12　五浦と六角堂

美術院の若い画家飛田周山の案内によって、天心が北茨城の五浦（いづら）海岸に土地を求めたのは 1903（明治 36）年のことであった [39]。

1905（明治 38）年、五浦近隣の平潟の大工、小倉源蔵に依頼していた六角堂が建てられる。天心自身のデザインである三畳ほどの部屋からは広大な空と海が広がり、思索にふける空間となった。

1898（明治 31）年頃から約 10 年間、日本美術院では空気を描く事を目指し、没線主彩の画法を実践していたが、その画法が美術評論家達から激しい批判を受け、「朦朧体（もうろうたい）」という罵倒的な命名をされた。その名は日本美術院作品そのものを批判する悪名となり、作品が売れなくなっていった [40]。

海外での評価が高まっていた天心であったが、そのような背景から日本美術院の五浦移転を「平家の都落ち」と擬すジャーナリストもいた。

五浦に移り住んだ画家達はそのような風評を払拭すべく、大観は新築したばかりの家を売り、観山は美校の職を辞す覚悟で通い、背水の陣を敷い

て新日本画の創造に取り組んだ。下村観山の「木の間の秋」（1907 年）、木村武山の「阿房劫火」（1907 年）等、五浦からは数多くの名品が送り出された[41]。

13　描かれた天心

彫刻家平櫛田中の彫塑「五浦釣人」、平山郁夫作「日本美術院血脉図」等、天心の姿を写した作品は、彼の印象を強く伝えている。

なかでも、下村観山が描いた「天心岡倉先生画稿」はその代表と言える。（図 10）[42]

道衣を着て、陰陽と八卦の模様の帽子をかぶり、煙草を薫らせる姿は、天心の身近にいた観山ならではの描写である。

本画は関東大震災によって焼失し、現在は図 10 のみ残されている。この下図には、平家物語絵画化のための構成案（天心直筆の手紙）が貼り付けられており、観山は芸術制作の助言者としての天心像も表そうとしていたことが分かる。

天心そのものを描いた作品がある一方、歴史的画題の作品中、暗示的に天心を表している作品も

図 10　下村観山「天心岡倉先生画稿」1921 年

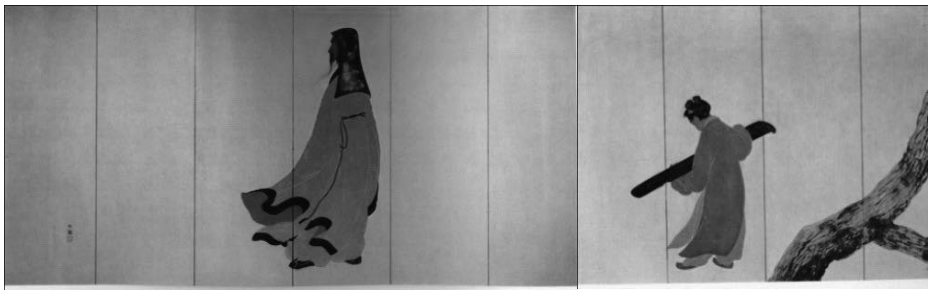

図 11　横山大観「五柳先生」部分　1912 年

多い。横山大観作「五柳先生」（図 11）[43] では、中国の詩人陶淵明を描いており、天心愛用の道衣の面影が認められる。

絵の中では、心で聴く無弦琴を童子が抱えている。存在するもの、目に映るものを知るだけでは、学問学術の真髄に触れることはできないという意味を持つ無弦の琴は、天心を暗示するモチーフである [44]。

14　原三溪と岡倉天心

横浜の発展に大きく貢献した原三溪（本名原富太郎。以下「三溪」という）もまた、若手画家の育成に支援の手を差し伸べ、新しい日本画の創造に尽くした人物である。天心と三溪を引き合わせたのは橋本雅邦の娘婿、橋本正素（のちの静水）である。

天心から三溪へ送られた、新進画家の援助を依頼する手紙も残っている。

橋本雅邦の門下にいた下村観山の作品「大原御幸絵巻」を見て、才能に深く感じいった三溪は、五十畳敷きの画室を備えた邸宅を建てて観山を招いた。それに応え、観山は 18 年間その画室から大作を完成させていった [45]。

現在、国の重要文化財となっている「弱法師」（図 12）[46] に描かれた白梅は、三溪園に咲く臥龍梅をスケッチしたものである。

図 12
下村観山「弱法師」
1915 年

天心の死後も、三溪は日本美術院の芸術家達の作品等を数多く購入し、支援を続けた。

15　終焉

1910（明治 43）年、東京帝国大学で東洋美術史の講義後、天心はボストン美術館に戻り、ヨーロッパ、中国、インドと世界を飛び回った。

インドでは病（肝臓萎縮病）を抱え、ひと月足らずの短い滞在であったが、女流詩人プリヤンバダとの出会いがあり、天心は死にいたるまでの１年間、幾通もの手紙を取り交わしている。天心が生涯最後に書いた手紙も、彼女に書かれたものだといわれている[47]。その後、ボストンに戻ったものの仕事を続けられる状態ではなく、五浦で静養することとなった。

1913（大正２）年、８月の文部省の古社寺保存会の会議に出席し、「法隆寺金堂壁画保存計画に関する建議案」を提出する。

天心の病状は進み、ひと月後の９月２日、新潟県赤倉の別邸で永眠した。法名は釈天心。この法名がのちに一般に広まり、現在に至る。

没後直ぐに日本美術院の再興が企てられ、翌年 1914（大正３）年の 10 月、日本美術院再興記念展覧会が開かれた。大観、観山、武山といった五浦の作家が中心となり、天心の遺志を継いで新しいスタートを切った[48]。

保存実施に関して文部省と法隆寺の交渉はなかなか進まず、1949（昭和 24）年に金堂は不審火で焼損し、貴重な壁画の芸術的価値は失われた[49]。

16　語り継がれる天心

天心の死後、様々な形で彼の影響力が現れる。

天心の『東洋の理想』冒頭の一句、「アジアはひとつ（Asia is One）」が、軍部や一部の言論人によって戦争を聖戦化するスローガンとして利用され、淺野晃の『岡倉天心論攷』[50] や佐藤信衛の『岡倉天心』[51] 等の関連書籍が出版されることになる。しかし、1945（昭和 20）年の敗戦以後、天心に対する評価は一転、厳しいものとなった[52]。

その後、宮川寅雄『岡倉天心』[53] や大岡信『岡倉天心』[54] のように、天心の思想を再評価しようという動きがあり、その後平凡社から岡倉天心全集が出版され、更に研究が進んだ。日本美術院の活動、茨城大学五浦美術研究所による地道な研究も再評価に繋がっている。1996（平成８）年には

茨城県天心記念五浦美術館が完成し、多くの入場者が訪れている[55)]。

2011 年３月 11 日、東日本大震災による津波被害を受け、天心が思索にふけった五浦の六角堂が土台を残して全て流出した。

茨城大学五浦美術文化研究所は六角堂の復元を試み、全国に寄付を呼びかけ、2012 年 4 月に創建当時の姿に復元された。

新しい六角堂は、窓ガラスや彩色に至るまで当時の製法で再現され、ここにも天心が提唱した普通修理法が用いられ、文化を継承している。美しく蘇った六角堂は復興のシンボルとしても注目されている[56)]。

天心が創立した日本美術院は、2014 年に再興 100 周年を迎える。

生誕 150 周年を記念し、天心の生涯を追った映画「天心」も 2013 年秋に公開された。(神奈川県内では横浜ニューテアトル伊勢佐木町で上映)

横浜美術館では 2013 年 10 月より「岡倉天心生誕 150 年没後 100 年記念事業」として「横山大観展：よき師、よき友―紫紅、未醒、芋銭、溪仙らとの出会い」を開催。同年 12 月からは「生誕 140 年記念下村観山展」が開かれた。

横浜で生まれた天心が掲げた理想が、様々な形で現代の横浜で伝えられている。文化の軌跡だけでなく、時間の経過による評価の変動も伝えていく資料保存の大切さ、難しさを改めて考えさせられる。

17　展示、その後

展示期間中は、利用者の方から質問やご意見を多く受け､天心への関心の高さを実感した。

総閲覧者数は 876 名。アンケートでは「文字が小さく読　みづらい」｢広報が不足している｣等のご意見が多く見られた｡｢天心の人物像や個性を掘り下げると人間的興味が湧き、ずっと良い展示になるのでは」というご意見には、史実をまとめる事に終始していた事に気付かされた。

図 13　当館展示ポスター

図 14　当館本館１階展示室の様子

当館の展示期間中に、横浜市中央図書館（以下「中央図書館」という）より展示パネル、資料の貸出依頼があった。

中央図書館では、「岡倉天心生誕 150 周年没後 100 周年記念企画」として講演会を開催。大倉精神文化研究所の所長による講演「天心の少年時代と当時の英語教育事情」、ホームズ研究家の田中喜芳による講演「岡倉天心とシャーロック・ホームズ」が行われた。

それらの講演会に合わせ、2013 年９月３日から 30 日まで、中央図書館の３階展示場でパネルの一部と資料の展示を行った。（図 15）[57]

その後、2013 年 10 月 10 日から３ヶ月間、横浜駅西口かながわ県民センター内生涯学習情報センターにて、天心に関する展示を行った。

図 15　横浜市中央図書館３階展示室の様子

おわりに

所蔵資料を中心に、あまり知られていない事実や背景を広く紹介する図書館展示は、「知識・情報を収集、整理、保管して利用に供する」という図書館の基本機能と結びついている。

図書館に本を読みに来る手軽さの延長で、未知の世界に触れる機会を得

られる図書館展示は、興味のすぐそばに資料が揃い、熱が途切れないうちに情報に辿りつける利点がある。

図書館資料を保管に留まらず利用者にアピールしていく為には、ボストンで茶会を開いた天心のように、魅力を伝え続ける地道な行動が不可欠である。

潜在的な利用者も含めて、図書館への興味を惹きつけ、今後の図書館利用の発展に結び付くような展示を心掛け、次の課題としたい。

注、引用・参照文献

1) 岡倉天心. “人間性の茶碗”. 茶の本. 社会思想社, 1995, p. 17-18.

2) 中村愿. 岡倉天心アルバム. 茨城大学五浦美術文化研究所, 2000, 219.

3) ワタリウム美術館. 岡倉天心日本文化と世界戦略. 平凡社, 2005, 274.

4) 「岡倉天心誕生之碑」筆者撮影

5) 岡倉天心生誕記念碑建設委員会. 岡倉天心生誕記念碑建設記念. 1959, p. 1.

6) 玉蘭斉. 横濱開港見聞誌 1. 1862.

7) 木下長宏. 岡倉天心　物ニ観ズレバ意ニ吾無シ. ミネルヴァ書房, 2005, p. 1-8.

8) 高田早苗. “24 章坪内君と西洋小説”. 半峰昔ばなし. 早稲田大学出版部, 1927, p. 49.

9) 吉田千鶴子. 〈日本美術〉の発見. 吉川弘文館, 2011, p. 8-13.

10) 前掲 3) p. 201.

11) 文部省音楽取調掛. 小學唱歌集. 高等師範學校附属音樂學校, 1885, 合本 1 冊.

12) 国宝 4　彫刻. 毎日新聞社, 1984, p. 12　図 3-1.

13) 岡倉天心. “日本美術史”. 岡倉天心全集 4 巻. 平凡社, 1980, p. 37.

14) 中村賢二郎. わかりやすい文化財保護制度の解説. ぎょうせい, 2007, p. 16.

15) 京都造形芸術大学編. 文化財のための保存科学入門. 飛鳥企画, 2002, p. 7-8.

16) 原田実. 岡倉天心. 三彩社, 1970, p. 28-29.

17) 前掲 2) p. 47.

18) 前掲 3) p. 102.

19) メディア・リサーチ・センター. 雑誌新聞総かたろぐ. メディア・リサーチ・センター, 2012 年版, p. 554.
20) 下村英時. “天心岡倉覚三略歴”. 生誕百年記念岡倉天心展. 朝日新聞社, 巻末.
21) 河北倫明. 大観. 平凡社, 1962, 図７.
22) 青木五郎. 史記の事典. 大修館書店, 2002, p. 257.
23) 福岡市美術館. 横山大観展. 福岡市美術館, 2006, p. 44.
24) 前掲 7) p. 195.
25) 春日井真也. インド　近景と遠景. 同朋舎, 1981, p. 121-122.
26) タゴール. “東洋文化と日本の使命”. タゴール著作集８巻. 第三文明社, 1981, p. 490.
27) 岡倉天心. “東洋の理想” 岡倉天心全集第 1 巻. 平凡社, 1980, p. 475-476.
28) 岡倉天心　岡倉一雄　岡倉古志郎. 理想の再建. 河出書房, 1938.
29) 前掲 27) p. 480-484.
30) 前掲 2) p. 116.
31) 岡倉天心. 岡倉天心全集. 聖文閣, 1935-1936, ３冊.
32) 前掲 2) p. 128.
33) 岡倉登志. 岡倉天心　思想と行動. 吉川弘文館, 2013, p. 134-136.
34) 前掲 31) p. 170-175.
35) 前掲 3) p. 214.
36) 斎藤隆三. “英文著書『茶の本』”. 岡倉天心. 吉川弘文館, 1960, p. 172-173.
37) 岡倉覺三. 茶の本. 岩波書店, 1929, 93ｐ, 岩波文庫.
38) 前掲 2) p. 142.
39) 斎藤隆三. 岡倉天心. 吉川弘文館, 1960, p. 177, p. 271 (略年表).
40) 前掲 16) p. 38-39.
41) 下村英時. “五浦の回想”. 生誕百年記念岡倉天心展. 朝日新聞社, p11.
42) 下村観山. 下村観山. 大日本絵画, 1981, 図 96.
43) 河北倫明. 大観. 平凡社, 1962, 図 21.
44) 前掲 2) p. 210 .

45） 中山敏．かながわの茶室・茶席．かながわ風土記．1997，第 237 号，p. 73-74.
46） 下村観山. 下村観山. 大日本絵画，1981，図 61.
47） 前掲 25）p. 158.
48） 前掲 16）p. 57-58.
49） 前掲 9）p. 199-202.
50） 淺野晃．岡倉天心論攷．思潮社，1939.
51） 佐藤信衛．岡倉天心．新潮社，1944.
52） 大河内昭爾．岡倉天心と横浜の文学．全作家．2006，63 号，P. 8-9.
53） 宮川寅雄．岡倉天心．東京大学出版会，1956.
54） 大岡信．岡倉天心．朝日新聞社, 1975.
55） 前掲 2）p. 204
56） 大林卓．天心の六角堂復興の象徴．日本経済新聞．2013-2-6，夕刊，７面.
57） 横浜市中央図書館提供写真

参考文献

1） 岡倉天心. 岡倉天心全集 1～8 巻、別巻. 平凡社, 1980.
2） 岡倉一雄. 岡倉天心をめぐる人びと. 中央公論美術，1998.
3） 茨城県天心記念五浦美術館. 茨城県天心記念五浦美術館所蔵資料目録．茨城県天心記念五浦美術館，2007.
4） 堀田謹吾. 名品流転/ボストン美術館の「日本」. 日本放送出版協会，2001.
5） 熊倉功夫. 陸羽『茶経』の研究. 宮帯出版社，2012.
6） 岡倉天心. 天心とその書簡. 日研出版，1964.

主要展示文献

1） 玉蘭斉. 横濱開港見聞誌，1862.
2） 神奈川県立近代美術館 編. 神奈川県美術風土記幕末明治拾遺篇，1974.
3） フェノロサ. 東亜美術史網　改訂版　上下巻. 創元社，1947.
4） 東京都美術館企画・監修. 写された国宝. 東京都写真美術館，2000.

5)　フェノロサ・天心の見た近江.滋賀県立琵琶湖文化館，2004.
6)　文部省音楽取調掛 編.小學唱歌集.高等師範學校附属音樂學校，1885.
7)　奈良国立博物館 編.仏像修理100年.奈良国立博物館，2010.
8)　新撰東京名所圖會第1巻.東陽堂，1896年.
9)　國華社.國華第835号.朝日新聞出版，1961.
10)　國華社.國華第1400号.朝日新聞出版，2012.
11)　日本美術院百年史編集委員会.日本美術院百年史第14巻.日本美術院，1993.
12)　岡倉天心.東洋の理想.平凡社，1983.
13)　岡倉覚三.宝石の声なる人に　プリヤンダバ・デーヴィーと岡倉覚三・愛の手紙.平凡社，1982.
14)　Okakura Kakuzo.The Awakening of Japan.J Murray，1922.
15)　Okakura Kakuzo.The Book of Tea.Duffield&Co,1925.
16)　淺野晃.岡倉天心論攷.思潮社，1939.
17)　日本美術院 編.　天心先生歐文著書抄譯.日本美術院，1922.
18)　岡倉天心生誕記念碑建設記念.岡倉天心生誕碑建設委員会，1959.
19)　東京国立博物館 編.ボストン美術館日本美術の至宝.NHK，2012.
20)　島根県立石見美術館.「森鷗外と美術」展図録.森鷗外と美術展実行委員会，2006.
21)　Victoria Weston.Japanese painting and national identity.University of Michigan,2004.